究極は「創造と即興」

個の育成

「僕のことを嫌いな教え子は多いと思う」。横須賀市のサッカークラブチーム「横須賀シーガルズ」の女子チーム総監督を務める亀田勝昭さん(72)は笑い、こう続ける。「だって、練習は我慢の連続だからね」

野球畑だった亀田さんが30歳代半ばを過ぎて独学で身につけ、95年から女子チームで展開した指導術。その根幹は、基本動作の繰り返しにある。ドリブル、リフティング、パス…。何十回、何百回とやって体に徹底的にしみこませる。

確固たる根拠がある。人間の体は18～20歳でピークを迎えるが、中学時代は、単純動作の繰り返しに耐えられる「ゴールデンエージ」と呼ばれる。そこで徹底的に基礎技術を習得させる。「将来のサッカー人生の礎を作れる重要な時期だから、嫌がられても、させないわけにはいかない」。代表の森雅夫さん(69)も言う。

もう一つ、特徴的なのが試合やミニゲームでの指導者の態度だ。あらゆる少年スポーツ指導の現場でつきものの怒声が全く響かない。「女子は大人の言いなりになる傾向があり、判断力や想像力が生まれない」。長年の指導を踏まえた、亀田さんの持論だ。

試合で選手は自由にプレーをしているが、試合後、ポイントとなった局面での判断の理由を、亀田さんらが必ず尋ねる。「考えながらサッカーをする癖はここでついた」。現在もシーガルズで活動する鈴木藍子さん(28)は振り返る。

また、本当に向いているポジションを担わせる前に、違う位置を経験させることもある。昨年のワールドカップで優勝に大きく貢献したFW大野忍選手(27)は小5から在籍した3年間の大半で、FWと対峙するセンターバックを担った。亀田さんは大野選手に「センターバックからFWの動き方を学べ。FWが嫌がるプレーを身につけ、将来FWになったらそれを避ければいい」と言い続けたという。

コーンを置いてのドリブル練習。徹底的な基礎練習が長時間続く＝横須賀市の神明中体育館で

怒鳴らず判断力磨かせる

「サッカーの究極は『創造と即興』。身につけた基本技術で何をできるか、自分でプレーを考えてチームメートとのあうんの呼吸で攻め上がる。そのために判断力を磨かせるのも、僕らの仕事」と亀田さんは言い切る。

「基礎練習ばかりだった効果が、正確なボールのコントロールという形で今、表れている」。中学3年間シーガルズに在籍した日本代表DF近賀ゆかり選手(27)は言う。大野選手は「センターバックをさせられることに当時は納得いかなかったが、トップレベルでプレーするようになってその意味が分かった」と感謝する。亀田さんは「基本を欠いた大人の言いなりのサッカーでは子どもたちの将来がない。成績が上がったのは結果論。私たちが発足以来こだわるのが、『結果よりも個の育成』で、選手と同様、私たちも我慢している。それが形になってきた」と話す。

仏国立サッカーアカデミー元校長で、日本サッカー協会が福島県で中高生養成のために設立した「JFAアカデミー福島」でも指導経験があるクロード・デュソー氏は07年、指導者向け冊子でこう記した。「結果よりも14、15歳までにしっかりしたテクニックとクオリティーを身につける重要性を理解する国が、他よりももっと前に進むことができる」。そのことを15年以上前に認識していた亀田さんが日本代表を5人育てたのは、必然だった。

【倉岡一樹】

＝つづく

なでしこの源流 女子サッカー主関長奈川 3